

まち並みや自然景観の中では、公共施設等の色彩も重要な役割を果たしています。

例えば、まち並みは道路を中心に形成されているため、沿道の建築物等の色彩だけでなく、道路空間の色彩が重要なポイントとなります。また、橋梁や樋門といった土木構造物は、その規模が大きいため、周辺の自然景観等に大きな影響を与えるため、周辺との調和に充分配慮した色彩が求められます。さらに大規模な公共施設等は、まちのシンボルとなることが多いため、県民が安らぎや潤いを感じられるような色彩とすることが求められています。

このように、公共施設等の色彩は景観に大きな影響を与えます。このため、公共施設等の整備にあたっては、十分に色彩計画を検討し、地域の景観づくりを先導するような整備が求められています。

基本的な考え方

● 親しみの感じられる色彩を基本に考えます。

公共施設等は、不特定多数の人が利用するものです。このため、人によって極端な好き嫌いが生じるような色彩や全く馴染みのない色彩を用いることは避けた方がよいでしょう。

周辺の景観と調和を図りながら、地域固有の自然や歴史などを考慮し、多くの人が親しみや愛着を感じられるような色彩とします。

● 普遍性、持続性のある品格のある色彩とします。

公共施設等は、まちの基盤となる施設として長期間同じ場所に存在し続けるものです。このため、一過性の流行にとらわれず、普遍性や持続性のある、飽きのこない色彩とすることが大切です。

地域のシンボルや安らぎ、憩いの場にふさわしい、品格のある配色とする必要があります。

● トータルデザインの中で色彩を考えます。

色彩だけでなく、形態、素材も含めたトータルデザインの中で考えていくことが大切です。色彩だけでは、おのずと限界があり、形態における工夫や素材感との一体性によって、色彩の効果も高まります。

● 関係機関との調整を行い、色彩を選定します。

色彩を選定するにあたり、担当者の主観に偏重せず、行政内部のみならず他の行政機関、事業者、地域住民などとも連携を図っていくことが大切です。

また、今後の適切な維持管理のためにも、色彩選定の根拠を明らかにしておく必要があります。

公共施設等の色彩設計の基本的な流れを例示します。対象となる公共施設等の規模、役割によっては、必ずしも同じプロセスになるとは限りません。

基本的には、「調査」、「計画」、「設計」、「維持管理」の4段階になります。必要に応じて「評価・検証」を加えることにより、よりよい整備を行うことができます。

		使用・作成するものなど
調 査	1 色彩ガイドライン等の把握 周辺の地域、地区の景観色彩に関するガイドラインなどを把握します。	色彩ガイドライン 公共施設等の景観づくり指針等
	2 地域における対象施設・空間のポテンシャルの把握 周辺の地域、地区における対象施設・空間の位置づけ、役割を把握します。	都市計画マスタープラン、景観計画 まちづくり計画、指針等
	3 現況の色彩の把握 周辺の自然や建物等の色彩を調べます。 明度や彩度の分布状況や景観の中で配慮が必要と思われるものの位置関係や色彩を把握します。	色見本帳（日本塗料工業界標準色見本帳など） カメラ等
計 画	4 色彩の方向性の検討 公共施設等のもつポテンシャル、周辺の現況の色彩を踏まえて、類似調和又は対照調和とするかを検討します。	現況写真、色値分析結果 設計一般図 等
	5 全体構成の検討 公共施設等を構成するものの中で、中心となるもの、付属的となるものを分類し、それぞれの色彩のあり方を検討し、対象物全体のイメージを構成します。	設計一般図
	6 配色案の検討 公共施設等を構成する部位別に配色を選定します。 必要に応じて、CGやフォトモンタージュなどを用いて、全体の色彩バランス、周辺の景観色彩との調和を確認します。	CG、フォトモンタージュ
設 計	7 配色案の選定 配色案について評価を行い、配色案を選定します。 必要に応じて、複数の専門家や地域住民等の意見を聴くことも必要です。	CG、フォトモンタージュ 意見を聴く場(検討会、説明会、ワークショップ)や調査(アンケート調査等)
	8 色彩計画書の作成 確定した配色案に基づき、平面図や立面図、仕上げ表などに色を記入し、色彩計画書を作成します。	設計一般図 色彩計画書
	9 施工・監理・検証 計画書の色彩が施工に反映されているか、監理が必要です。また、必要に応じて完成後に検証します。	
維 持 管 理	10 維持管理 完成後は、美観が保たれるよう、その維持、管理に努めます。	維持管理計画

(1) 自然的景観の中の公共施設等の色彩

山地、河川、海岸などの自然的景観の中では、背景となる自然的景観の色彩より低明度とすることが基本となります。自然的景観の色彩は、様々な色彩により構成された複合的な色であることを認識し、類似調和を基本に色彩を選定します。大規模な公共施設等の場合は、大面積の単色の人工色となることを考慮し、山地の緑、海の青といった同じ色相を安易に大面積で用いることは避けたほうがよいでしょう。できるだけ、周辺の景観から目立たないような色彩を選定する必要があります。

ただし、場合によっては地域のシンボルとして対照調和となる色彩を選定することもあります。その場合は、現況把握だけでなく、景観シミュレーションなどにより将来予測をするなど、十分な検討を行った上で色彩を選定することが必要です。

(2) 社会・経済的景観の中の公共施設等の色彩

● 道 路

まち並み景観において道路空間の色彩は重要な役割を果たしています。良好な景観形成を推進するためにデザインする場合は、シンプルなものとし、控えめな色彩を基本とします。

道路を構成する路面、植栽、照明、横断防止柵などは、色だけでなく素材によっても雰囲気異なるため、色と素材の組み合わせにより、選定していくことが必要です。

また、道路空間をトータルでデザインするにあたり、空間を構成する様々な道路占用施設についても、事業者等と色彩に関する調整や連携が必要となります。

● 大規模な公共建築物

大規模な公共建築物は、地域の顔として周辺の良好な景観形成を先導するようなものでなければなりません。色彩検討にあたっては、周辺の色彩特性を十分に把握した上で、形態、素材とともに総合的な視点で色彩を選定していく必要があります。

基本的な考え方で示したように、親しみが感じられる、普遍性、持続性のある品格のある色彩とします。

